

神戸建築学は、著名な建築家や研究者等を講師としてお招きしてご講演頂く講演会である。講演後には講師と神戸大学の院生・学部生との自由な討議の機会を設け、新たな環境創造における建築学の可能性を探る機会として開催している。2022年度では第48回目となる講演会を、建築家で早稲田大学准教授の渡邊大志先生をお呼びして、また、第49回目となる講演会を、建築家で武蔵野美術大学客員教授の永山祐子先生をお呼びして行った。2回目はオンライン形式での開催となった。

## 神戸建築学 第48回

# 「Xover Architecture」

**渡邊 大志** 建築家・早稲田大学准教授

1980年生まれ。専門は建築デザイン・都市史。リンクアーキテクツ株式会社主宰、世田谷まちなか観光交流協会委員、港区景観審議会委員、第22期日本建築学会代議員、東京建築士会事業委員。2005年早稲田大学建築学専攻修了(石山修武研究室)。同年石山修武研究室個人助手。2012年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(伊藤毅研究室)。2016年早稲田大学創造理工学部建築学科准教授、株式会社渡邊大志研究室一級建築士事務所設立。2019-2020年フィンランド・アアルト大学客員研究員。2022年、リンクアーキテクツ株式会社に改称。主な作品に「節会/倉庫と舞台」「レッドハウス」「モリスハウス」など。主な展覧会に「ひとつなぎの建築 Unity Architecture - 3 projects, 3 exhibitions, 18 objects - in Finland and Japan」展、「Nation of Sorrow」展など。単著に『東京臨海論一海からみた都市構造史一』(東京大学出版会、2017)、『ひとつなぎの建築』(ADP出版、2021)など。主な受賞に、東京建築士会住宅建築賞金賞(2021)、日本フィンランドデザイン協会賞(2021)、日本建築学会作品選集新人賞(2022)など。



「形態は機能に従う」と言った建築家がいますが、そうではなくて「機能は形態に従う」という時代になっているのではないかと。一つの形態に一つの機能はなかなか難しい時代になっているのではないかと。20世紀的な手法をする限り根本的な解決にはならない。

そこに一石を投じたいと思い、Xover Architectureに関する展覧会をしている。ベルリン等複数の場所で展覧会をしているが、全く同じ展示物をその場所のコンテキストに沿って全く違う説明をした。一つの物事の解釈が一元的であることをどうやって超えられるのか、どれだけ他者と共有できるかということがXover Architectureの精神と考えている。

## 建築におけるモニュメンタリティとは

ライヒスタークの建築に可能性を見出したい。元々議事堂として第二次世界大戦前も使われていたが、戦争で破壊された。その後ベルリンの壁が崩壊した際に再び国会議事堂として位置付けられ、ノーマン・フォスターが設計した。大戦の前の建物のネオクラシシズムのモニュメンタリティをフォスターがガラスのドームをかけることによって民主主義のモニュメンタリティに作り替えた。つまり、モニュメンタリティは更新可能であることの1つのヒントを与えていると考えている。

そういったことを我々の社会に作れているだろうか。つまり次の時代のモニュメンタリティに備えるための余白をどれだけ担保できているのか。余白が担保されていない建築はおそらくいずれ壊される。

## レッドハウス

築80年三軒長屋で、5年後に壊れることが前提のプロジェクト。どれだけ安くできるかに加え、新築を前提とした不動産のグレーゾーンにいか位置付けるかを考えた。建設会社、施工者、設計者や施主等の職能を一旦バラして設計者と施主で全部やれるように再構築した。僕がやったことは、図面は一枚も書いていなくて、買い物リストをつくること。毎週施主の奥さんにリストを渡し、どの部品をいつ買ってくるかに関する工程管理を行った。買い物リストが設計図書。築80年の建築は図面を水平に書いても実際は水平でない等図面を書く意味がほぼない。工業製品や現場で出た素材をアッセンブルして手仕事で作った。

## モリスハウス

次の施主は、アンティーク家具を持っており、それにあう内装を作って欲しいという要望だった。つまり初めから構造体の概念はない。いい建築家は思想を構造で表現しようとするが、ここではできない。つまり「建築に空間が従う」のではなく、「内装に空間が従う」その逆転性が面白い。施主も一人の表現者で、こういう物が好きですと表現している。そういうフィールドの上に何が建てられるか考えた。結果として、工業

[日時]

2022年7月11日(月) 18:00-20:00

[司会・進行]

光嶋裕介(特命准教授)

[担当学生] ◎:代表

◎松井峻 高垣翔 君塚俊太郎 二宮幸大 木崎理沙 松岡絢加 周賢人 奥村紗帆 眞下健也(M1) 三田玲 山本泰斗(B3)

[参加者数(概算)]

57名

## 1.はじめに

今回渡邊先生には、様々なプロジェクトと共に設計の思想やプロセスを説明していただいたが、本稿ではその思想や、特に多く言及されていたプロジェクトの要点を抜粋させていただきたいと思う。

## 2.講義概要

### Xover Architectureとは

20世紀的な枠組みをいかに超えていくか、について1番の関心がある。簡単にいうと、世界は下部構造(インフラ)と上部構造に分けて考えられるという認識をいかに超えていけるのか。20世紀の建築は上部構造に属していた。電気等の都市インフラや、年金等の社会インフラが壊れかけている時代に、上部構造だけ設計してうまく社会の中で稼働して行かないだろうと考え、下部構造と上部構造を横断する建築を「Infra Architecture」と名付けた。横断に角度を与えると「Xover Architecture」となる。上下を横断するだけでなく、場所や民族、国、集団などをリンクさせる建築として考えている。おおよそ100年前に、

製品を組み合わせるアンティーク家具に調和するようなXover Product (Xover Architectureの考え方をより身近なスケール・値段で適用したプロダクト、機能を持つ前の曖昧な立体)を製作し、それを用いて内装を設けた。工業製品は付加価値0だが、Xover Productsはアートだから値段を決められ、付加価値が付けられる。アンティーク家具も同じ考え方ができる。ユーズドとアンティークの違いはマーケットが決める。マーケットと価格の関係をどうアッセンブルするのかということに取り組んだ。この方法論と理論を「モリスハウス」と呼んでおり、これが建築の名前として呼ばれていけば姿形は如何様にも変容できる。モニュメンタリティがひとつではないし、他の人が新しい考えを入り込む余白ができる。

### Xover House

これはXover Productsの住宅版とも言えるプロジェクトで、フィンランド政府と共同開発している。まず一つのアーキタイプを設計している。そのモジュールは1200×2400mmでできており、国を跨ぐことができる。その狙いは、全く同じ図面の建築が違う場所の違う工法を使って建設できるということ。それがないと全ての設計図書は設計し直しになるか、またはどこかで建てたものを持っていく方法しかなくなる。しかしその設計図書が、違う場所での工法でも建てられるなら、ものを移動する必要もないし、設計図書をつくり換える必要もない。それをどのように実現するかを考えたとき、たまたま日本とフィンランドで1200×2400mmのモジュールが一致していた。この建築はダブルグリッドで設計しており、グリッドの間が1200mmとなっている。壁厚はダブルグリッドの中で収まるので、部材寸法の問題が生じない。そのようなアーキタイプを作って、それを長屋的に繋げた税金で作る社会住宅や、民間のお金で作るハイスペックな商業建築のタイプも考えた。このように、資本の形式と用途が変わったとしてもずっと使い建設し続けることができる建築となっている。そのプロトタイプを作ることがこのプロジェクトの狙いであった。その値段は延べ床面積で決まるのではなく1200×2400mmのパネルが何枚かで決まるため、値段に対する延べ床の広さのインパクトは小さい。1960-70年代の、人口が増え住宅が足りなかった時代は、箱を標準化するとライフスタイルが標準化されるということが目指された。しかし逆に箱を標準化することによってライフスタイルが多様化する、そういう標準化があり得るのではないかと考えている。ゆくゆくは、同じプロトタイプを使った住宅や各種施設から構成される小さな都市を設計できたら良いと思っている。

### 節会

これはXover Architectureの技術的な歴史観だけではない。しかし、そこから現れる空間性には通じるものがある。「節会」は、儀式という言葉の古語である。それは空間認識としては面白いものを持っている。儀式空間というのは、概念しかないため、箱がいらぬ。それと同じで、ヨーロッパ的にいうと住宅という容器があって、そこに人が入るといふ考え方だ。対して人間が振る舞った形が結晶化したのが家になる——そのようなことができないかと、これを設計した。従来の現代住宅に必要

なもの、押し入れと水回りと寝室。この建築をつくる時、倉庫と舞台という言い方をしているのだが、そういうものを倉庫に入れ込んでしまつて、何の機能もない舞台と言われるものを敷地の中央に置く。舞台の横は立体的な庭になっており、舞台の上下を有機的に繋いでいる。昼間と夜で一つの建築に2つ以上のモニュメンタリティやファサードをつくりたいと考えた。時間が変わると建築の姿が変わっていくようになっている。

### Unity Architecture

最終的にはこういったXover Architectureを色々組み合わせることで、Unity Architecture (ひとつなぎの建築) —— ひとつの考え方が一元的ではなく、それでもちゃんと論理として成立して、第三の場所で適用可能であり、そしてそれが本来意図していた意味と違うことに使われていて全く構わない (むしろそれを促したい) ——、それを成立させたいと考えている。どのように成立させるかを考えていくことによって、強いナショナリズムが弱いナショナリズムを攻撃していくことでしか維持できない社会ではない社会を作りたいと考えている。

### 3.担当学生考察

我々は、事前学習で「Xover Architecture」の思想や建築作品を分析するにあたり、「越境」という言葉に着目した。渡邊先生は建築という分野を「越境」し他分野の考え方や要素を取り入れることによって建築空間の可能性を拡張させている印象を受けた。しかし、講演を聞き、その概念は自身の建築空間に限らず、さらに広く「建築を含む社会の20世紀的な枠組みをいかに超えるか」というところまで拡張された概念であることがわかった。

我々の生きる21世紀は、高度経済成長期に造られたインフラを含めた更新の時期にきている。「更新」とは既存のコンテキストを掘り上げ、新しい価値へと「翻訳」する行為である。その際、建築家はそうした様々なヒト、モノ、コトの意志を再構築する存在なのではないか。例えば、「モリスハウス」においては、施主という翻訳者を介して生まれた付加価値の付いたモノと、建築家の構築する意志が混ざり合い、これまでにない新しいデザインの可能性を示唆している。

感染症の影響も合わせ「建築とはどうあるべきか」という課題が問われている現代において、「Xover Architecture」の提示する「越境」の概念が今を乗り越えるヒントになるのではないだろうか。

(文責: 二宮幸大、木崎理沙)



渡邊先生と神戸大学の担当学生、教職員での集合写真